有利なニラの促成栽培

岡田晟

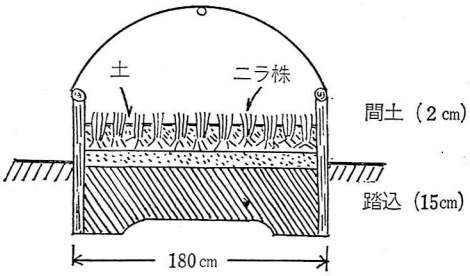
ニラは一月から四月にかけて、青物野菜の不足する時期に促成して、店頭を賑わし、既に季節のものとして重要なものです。最近は〝ギョーザ〟の流行とともに需要も急増しております。ニラは輸送によって品質が極端に損なわれるので、輸送ものに押さえられがちな消費都市近郊の促成として、経営上極めて有利なものとなりつつあります。

ニラの葉には蛋白が二・七〇%位含まれ、熱量も多く、一〇〇㌘中ビタミンA六、〇〇〇IU、B_1、B_2、Cも含まれ、極めて栄養の高いもので特有の臭気があります。これは硫化アリール（葫油）の一種といわれています。

ニラの一般露地栽培は大ていの人が実施しているので、ここでは促成栽培として利用されているフレーム踏込栽培、トンネル栽培、温室栽培について述べます。

繁殖方法

種株の繁殖方法として実生と株分けによる方法とがあって、一般には仕事も容易な株分法が行なわれております。実生方法は春融雪直後、四月下旬葱の播床と同様な床をこしらえ、坪当たり一デシ見当を播種するか、あるいは促成する位置に、所定の株間をとって坪播する方法がとられております。大体播種後二週間前後で発芽し、六月下旬から、七月始めにかけて混んだ処を間引いて肥培すると、秋迄には二〜三本に分蘖します。発育の程度にも依りますが、秋定植して翌年は株の培養につとめる事になるので、翌年からフレームをかけ収穫を始める事も出来ます。株分けの方法は、大体何時行なっても差支えないもののようですが、促成を早めるためには九月から十月半ば頃迄に行なった方が良いでしょう。まず古株を掘り起こして、大体一握り程度の大きさに株を切割って植えつけます。



踏込促成ニラ床

植込みの要領

地下水が低く風当たりの少ない場所をえらび、反当たり堆肥二、〇〇〇㌔〜四、〇〇〇㌔を鋤き込み、長さ六尺（一八〇㌢）の硝子障子をかけるようベットをこしらえ、少量の下肥、木灰を施して、畦幅三〇㌢に株間一八㌢〜二四㌢の一畦九株〜七株の正常植とします。前にも述べたように植える株の太さは、太めに植えた方が収量は多くなります。四〜五年にわたりそのまま株を利用すると、株が高くなってはきますが、太くなりすぎるような事はありません。

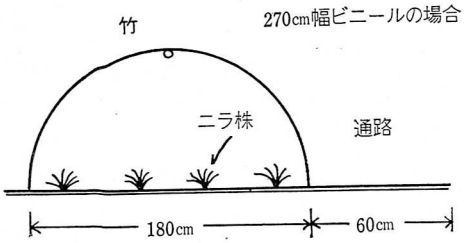
植込みの深さは一五〜一八㌢の深植とするかベットとベットの間を稍広めにあけておいて、活着迄浅植して、秋遅くにベットの間の土を掘上げ覆土することも考えられます。温室促成と異なって、フレーム促成では生育中に肥土を覆土する事は容易でないので、なるべく深植えとした方がよいでしょう。深植えは価格の点で有利な白根の収穫が出来るばかりでなく、葉先が地上に現われてからの発育は浅植えのものより良いようです。

植付け後二〇日ぐらい経って葉が動き始めると、鶏糞を始め下肥を多量に施用します。ニラは多肥に耐え、施肥量の多い程結果の良いものとされておりますが、植込み時に多肥するとやはり植傷みが出るので、寧ろ畑の肥えている処では定植の際無肥で植付け、活着後施肥した方が良いようで、施肥量は反当成分で窒素二二㌔、燐酸八〇㌔、加里一五㌔位を要するといわれ、主として自給肥料で補うのが得策であります。

フレームによる促成

促成開始の時期は融雪との時期もにらみ合わせ、二月中下旬頃で、それ以前に始めるのも可能ではありますが、除雪等の作業から見ると容易でありません。

先ず積雪を割りベットを出し、框板でかこみ硝子障子をかけます。始めは少なくともベットの周囲八〇㌢ぐらいは除雪すべきで、出来るだけ早く周囲にヨシズを廻らし風を少しでも避けるようにし、保温のためには床内の地面にビニール被覆をすると効果が大です。このように保温すると間もなく発育を始めて来ます。ニラは大体日中一〇度C前後になると発育を始めるといわれています。硝子障子の上はヨシズを覆う。この頃はまだ降雪があるので除雪にも好都合ですが、日中のチラホラ程度の雪にはつとめてヨシズをはぐるようにした方が保温上よいでしょう。管理として特別な作業はありませんが、何といっても難作業は除雪で、日中二〜三回ぐらい障子



ニラのトンネル栽培